

巻頭言	新たな世界市民教育に向けて 副学長・学士課程教育機構長 西浦 昭雄……1
[WLC]	WLCの取り組み……2-3
[GCP]	GCPの取り組み……4
[SPACE]	2025年度秋学期についてのご報告……5-6
[CETL]	CETLの取り組み……7
	データサイエンス教育推進センター……8
	新任教職員紹介……8

## 新たな世界市民教育に向けて

副学長・学士課程教育機構長 西浦 昭雄



**こ**の度、関田一彦先生の後任として学士課程教育機構長に就任いたしました。重責に身の引き締まる思いですが、本学の教育発展のため全力を尽くしてまいり所存です。就任にあたり、自己紹介を兼ねて、私と本学の学士課程教育との歩みについて述べさせていただきます。

私の学士課程教育への関わりは、2008年度に教育・学習支援センター（CETL）の副センター長を拝命したことに始まります。その後、2010年度の学士課程教育機構発足と同時に副機構長となり、全学的な教育改革の最前線に身を置いてまいりました。また、同年スタートした「グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）」の運営に携わり、2013年9月の中央教育棟（Global Square）開所時には、総合学習支援センター（SPACE）の初代センター長として、学生の主体的な学びを支える環境づくりに取り組みました。その後、8年間の教務部長、4年間のGCPディレクター、そして2024年度からの2年間の経済学部長を経て、現在は副学長として3期目を務めております。これらの経験を通じ、常に「学修者本位の教育とは何か」を問い続けてまいりました。

**さ**て、本学の教育は本年4月より、「新たなステージ」を迎えます。それぞれ55年、50年の歴史を刻んだ経済学部と経営学部が統合し、経済経営学部ビジネス学科（通学・通信課程）の新設をはじめ、理工学部のグリーンテクノロジー学科、生命理工学科への再編・開設など、時代の要請に応える組織改編が結実いたします。また、法学部法律学科は「法律政治学科」へ、教育学部教育学科は「心理・教育学科」へと名称を変更し、多くの学部・科目においてカリキュラムの刷新を行います。本改革においては、創価女子短期大学が長年培ってきた尊い知見を全学で継承し、共通科目として「創価女性教育の理念と実践」や「グローバル社会と女性のエンパワーメント」等を新設いたします。さらに、文学部と学士課程教育機構が連携した「中国語・ロシア語インテンシブコース」の開設や、学びと経験のプロセスを可視化する新しい学習ポートフォリオの運用開始など、多角的な展開が始まります。

**創**立者池田大作先生が米国コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジにて「『世界市民』教育への一考察」

と題する講演を行われてから、本年で30周年の佳節を迎えます。この記念すべき年は、本学の世界市民教育にとっても、次なる高みへの「出発の年」となります。本学はこれまで、2010年度のGCP発足、2014年度の国際教養学部の開設、そしてスーパーグローバル大学（SGU）創成支援事業における10年間では、「人間教育の世界的拠点の構築」をめざし、「創造的世界市民」の育成に努めてまいりました。2018年度には共通科目に平和・人権・環境・開発の4分野からなる「世界市民教育科目群」を設置し、全学的な浸透を図ってまいりました。

**現**在、中長期計画「Soka University Grand Design 2021-2030」の第2フェーズとなる後期計画（2026-2030年度）がスタートしました。そこでは「世界市民教育の成果の可視化」を重点項目の一つに掲げています。具体的には、現在の「創価コアプログラム」をさらに発展させ、2030年度には「世界市民教育コアプログラム」として全学展開することを目指します。これまでの個別プログラムによる成果を全学的な体系へと再構築し、アセスメント（学修成果評価）の手法を確立することで、教育の実質化と継続的な改善を加速させていく方針です。本年11月には、池田大作記念創価教育研究所の主催により「第2回世界市民教育シンポジウム」も開催されます。

**昨**今、高等教育界で重視されている「学修者本位」というパラダイム・シフトは、本学が開学以来守り抜いてきた「大学は学生のためにある」「学生第一」という指針と深く符合するものです。混迷を極める国際情勢の中で平和への希求が高まり、同時に生成AIの急速な発展が教育の真価を問い直している今、社会の課題を自分事として捉え、智慧を振り絞って貢献する分析力、協働力、そして何よりそれらを突き動かす強いモチベーション（動機づけ、意欲）が鍵を握ると確信しています。本学に根付く「何のために」「誰の（誰が）ために」という本質的な問いかけは、今後ますますその重要性を増していくでしょう。本学の世界市民教育をさらに深化・展開していくことが、人類社会への確かな貢献になるとの決意で歩んでまいりたいと思います。

## 中国南方科技大学言語教育センター長胡玉秀博士特別寄稿

ワールドランゲージセンター（WLC）の尾崎秀夫センター長は、2025年11月中国南方科技大学（Southern University of Science and Technology：SUSTech）で行われた学術学会に参加し、同大学言語教育センター長の胡玉秀（Hu Yuxiu）博士と懇談しました。同大学の語学教育を牽引する言語教育センターの活動について、ご寄稿をお願いしたところ、以下のように丁寧な説明をいただきました。謹んで掲載させていただきます。

「言語教育センター（Center for Language Education：CLE）は、2015年11月にSUSTechの教育担当部門として設立されました。10年にわたる発展を経て、CLEは現在、特色あるプログラム、高水準の教育チーム、そして革新的かつ包括的な学生育成システムで高く評価される、極めて国際色豊かな組織へと成長しました。

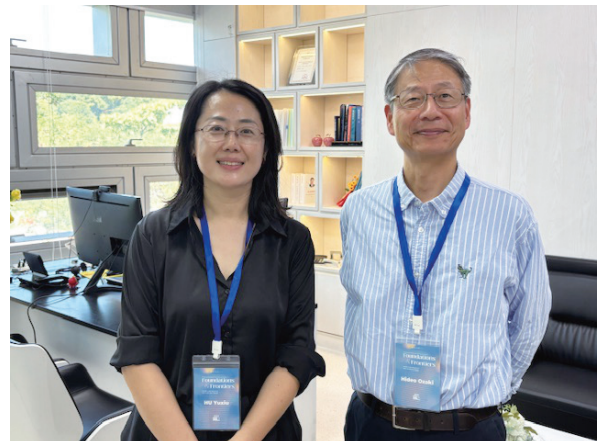
私たちの中核となる使命は、外国語と文化について優れた教育を提供すると同時に、活気に満ちた魅力的な学習環境を育むことです。学部生・大学院生の双方が、国際的な学術環境で活躍するために必要な言語運用能力を身につけられるよう支援することを目指しています。特に重視しているのは、SUSTechにおける英語による専門教育（English-Medium Instruction：EMI）プログラムに学生が適応できるようにするための英語教育です。英語を、専門分野の知識を習得し、批判的思考力を磨き、国際的な学術コミュニケーションのニーズに応えるための実践的なツールとして活用できるよう、学生を育成しています。

CLEは、多角的なリソースやプログラムを包括的に提供することで、大学全体の学習文化の形成において重要な役割を果たしています。主な取り組みとして、スキル

特化型準備プログラム、レベル別SUSTech Englishコース、ならびに学術英語（English for Academic Purposes: EAP）があります。さらに、学際的かつ革新的な選択科目、マンツーマンの言語サポートサービス、ワークショップ、イングリッシュ・コーナー、読書会などの活発な課外活動を通じて、学生の学習体験を一層充実させています。

情熱と創造性をもって、CLEはグローバルな語学教育・学習における卓越性を追求しています。今後も、大学の国際化目標への支援をさらに拡充し、革新的な教育方法を推進するとともに、学生が世界の舞台上で自信を持ち、効果的に意思疎通できる人材となるよう努めてまいります（原文英語、尾崎秀夫訳。）

CLEの理念はWLCの理念と共鳴します。今後両センターがともに発展し、各大学の学生の教育に大いに貢献することが期待されます（尾崎秀夫）。



## WLCコース別教員会議報告

2025年度秋学期のコース別教員会議は、1月21日にオンラインで開催され、午前中に英語科目の基礎・初級、午後に中級・中上級のコース別に分かれて実施されました。これらの会議は、WLCにおけるカリキュラム開発を継続的に支援することを目的とし、最新情報の伝達、協働的な協議の機会、そして授業実践における生成AIの活用方法の共有の場を提供しました。

本会議では主に、教育・学習に生成AIを実践的に取り入れる方法を探りました。各コースにおける生成AI利用

についての明確性と一貫性を確保するため、シラバスにAI利用ポリシーを盛り込む方針が共有されました。その他、コーディネーターから、授業概要、評価基準、シラバス作成、教員研修などに関する確認が行われました。

午前のセッションでは、「実践共有」と題し、2件の発表が行われ、授業準備、授業内活動、学生のエンゲージメント向上に生成AIを活用するための実践的な方略が紹介されました。午後のセッションでは、Notebook LMとChatGPTを活用し、学生一人ひとりに合わせたリスニン

グ教材を作成する学生中心型の作業手順が紹介されました。

各発表の後、教員はレベル別のブレイクアウト・セッションに参加し、生成AI導入に関する経験の共有、懸念点の提起、実践上の課題、ならびにシラバスのCan-doステ

イトメントの修正について意見交換を行いました。会議の最後には、コーディネーターが教員からのフィードバックを取りまとめ、シラバスの更新に反映することとしました。これにより、WLC教員間の協働がさらに強化されました（フォレスト・ネルソン）。

## 京都外国語大学ランゲージセンターの皆様ご来訪

2026年1月15日、京都外国語大学ランゲージセンターから、5名の教職員の皆様がWLCのセルフアクセスセンターを訪問されました。当日は、尾崎秀夫センター長、学習支援課の平野光彦副課長、平井優香さんが出席し、セルフアクセスセンターの運営や生成AIの活用方法、スタッフトレーニング体制、教員の関与の在り方等について意見交換を行いました。特に、課題に依存せず自律的に学習

する学生をどのように育成するか、VIP制度やイベント運営、留学制度とセルフアクセスセンターの連動など、実践的なテーマが共有されました。また、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に基づくレベル分け、学内英語能力試験の内容や実施方法、大学院生向けライティング支援についても議論が及びました。今後の両センターの継続的な交流を約して懇談を締めくくりました（尾崎秀夫）。



### ■WLC 教員の紹介 渡辺哲子講師



渡辺哲子 (Tessa) 講師は、小学校から大学まで創価一貫教育に学び、パーミンガム・シティ大学で英語言語学の修士号 (MA)、ロンドン大学 (UCL) で教育社会学の研究修士号 (MRes) と教育学の博士号 (Ph.D.) を取得しました。2001年に、Chit Chat Clubのアシスタント・マネージャーとしてWLCで勤務を開始し、創価女子短期大学で英検やTOEICの授業を担当した後、渡英しました。約10年間の英国滞在中には、UCLの博士課程で授業を担当し、会議通訳としても欧州各国で活動しました。日本に帰国後は、東京科学大学 (旧

東京工業大学) での国際交流の特任専門員を経て、2022年にWLC講師として着任しました。現在は、池田大作記念創価教育研究所と平和問題研究所の所員も兼務しています。渡辺講師の研究分野は、国際教育におけるカリキュラムと教授法です。これまでに、英国、米国、ドイツ、中国、インド、ケニアなどの国際会議で、国際教育や価値創造教育に関する招聘講演や発表を行ってきました。WLCの授業では、学生から「苦手だった英語が好きになった」「分かりやすく楽しい授業だった」との声が多く寄せられており、渡辺講師は「今後も、学生が学ぶ喜びを実感できる授業に努め、人間主義のグローバル教育に貢献していきます」と抱負を述べています。

GCPディレクター 教授 朝賀 広伸

## 地球規模の課題に挑む「解決策」を提言

### 第15回GCP成果報告会を開催

2025年12月6日（土）、グローバル・シティズンシップ・プログラム（GCP）の第15回成果報告会が開催されました。この報告会は、GCP生が2年間の学びの集大成として挑む「プログラムゼミⅣ」の最終発表の場です。学生たちは自ら選んだ地球的課題を深く分析し、「学生の立場から何ができるか」という視点で具体的な解決策を提案します。今回はGCP15期生が以下の4組に分かれ、多角的な視点からプレゼンテーションを行いました。

- 衛生：「バングラデシュにおけるヒ素汚染問題の解決」、
- 環境：「化粧品業界におけるプラスチック容器削減の促進」、
- 栄養：「エチオピアにおける子どもの栄養改善」、
- 環境：「現代における新たな選択肢「樹木葬」の可能性」

コメンテーターには、JICA研究所（現JICA緒方貞子平和開発研究所）元所長の北野尚宏教授（早稲田大学）

をお招きしました。北野教授からは、各発表に対し専門的な知見に基づく鋭いフィードバックをいただくとともに、「地球規模の視野に立ち、日本そして世界で活躍されることを心より念願しております」との温かい激励の言葉が贈られました。



## 「世界市民」としての第一歩！

### 第13回GCP修了生、それぞれの挑戦へ

春の息吹を感じる3月17日（火）、第13回GCP修了式が開催されました。秋谷理事長、鈴木学長が見守る中、修了証を手にした28名の表情には、厳しい研鑽を積み上げた自信が溢れていました。代表の行田恵美さん（GCP12期・経営学部卒業）は、香港留学と継続的な挑戦が実を結び、栄えある「ダヴィンチ賞」を受賞。春

からは日本を代表する総合印刷会社でその手腕を振るいます。また、稲田正則さん（GCP13期・経済学部卒業）は、南アフリカ留学、日本政策学生会議、そして北京の国際会議と、世界を舞台に走り抜けました。彼の次なるステージはオランダの大学院。持続可能性経済学という地球的課題の解決に向けた研究が始まります。困難を共にした仲間との絆を胸に、28名の若きリーダーたちが、今、世界へと羽ばたきます。





# 2025年度秋学期についてのご報告

2025年秋学期のSPACeのサービスは、基本的に対面で（一部オンラインを併用）行いました。  
以下、各部門の秋学期の利用者統計とオアシスプログラムの年間相談件数の統計を報告します。

## 日本語ライティングセンター（JWC）

■表1 2025年度秋学期 JWC利用者（件）

	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期合計	%
チュータリング（実施数）	0	64	75	94	38	271	60.5
レポート診断	0	36	35	76	30	177	39.5
月別合計	0	100	110	170	68	448	100.0

■表2 2025年度秋学期 JWCセミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	主催	参加者
1	10月25日	レポートレベルアップ相談会	JWC	14
2	11月20日	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC	8
3	11月21日	レポートレベルアップ相談会	JWC	7
4	12月23日	大伴家持の館に咲いた花～万葉歌とシルクロードの交差点～	図書館・JWC	43
5	1月28日	哲学教員が語る私の一冊	図書館・JWC	21
秋学期合計				93

## 調べごと相談

■表3 2025年度秋学期 SPACe 調べごと相談「レファレンス」利用者（件）

内訳	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期合計	%
学術文章作法	2	6	2	6	2	18	85.7
演習（卒論）	1	1	1	0	0	3	14.3
その他	0	0	0	0	0	0	0.0
月別合計	3	7	3	6	2	21	100.0

※調べごと相談は、  
①対面②Zoom③メール  
を併用して実施

## HELP DESK

■表4 2025年度秋学期 HELP DESK利用者（件）

内訳	9月	10月	11月	12月	1月	秋学期合計	%
予約	13	23	30	35	14	115	69.7
飛び入り	11	18	15	6	0	50	30.3
月別合計	24	41	45	41	14	165	100.0

■表5 2025年度秋学期 HELP DESK学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー	参加者
1	10月17日	交換留学B日程出願対策セミナー	25
2	11月19日	TOEICセミナー	18
秋学期合計			43

## オアシスプログラム

■表6 2025年度 オアシスプログラム相談件数（件）

学年	内訳	学部	内訳	性別	内訳
1年生	213	経済	42	男	775
2年生	333	法	133	女	267
3年生	271	文	386		
4年生	153	経営	91		
過年度生	71	教育	213		
不明	1	理工	152		
		看護	24		
		国際教養	1		
年間合計	1042		1042		1042

## SPACEスタッフ研修

SPACEでは、学生スタッフ・教員・職員が連携して正課外で学生の学びを支援しています。2026年度には学部学科の開設・改組や4年に一度のカリキュラム改訂が行われることから、春休み期間中（2026年3月24日～27日）に日本語ライティングセンター（JWC）・HELP DESK・オアシスプログラムの新規スタッフと継続スタッフ合同でスタッフ研修を行いました。研修の到達目標は、SPACEのビジョン・ミッションと新体制を理解し、自分の役割として求められることや支援に必要な知識・スキルを説明できるようになることです。

**全スタッフ研修** 初日はお互いのことをよく知るために、全スタッフで合同研修を行いました。まず、SPACEのビジョン・ミッションとして「全ての学生のための学習環境改善推進（ALE: Advancing Learning Environment for All at Soka University）」を掲げ、全てのスタッフが学習支援に関わっていくことを確認しました。そして、カリキュラム改訂に伴い、ターム制（8週1単位）科目が拡大し、アカデミック・ライティングⅠ・Ⅱ（1単位×2科目）、思考技術Ⅰ（必修：1単位）・Ⅱ（選択：1単位）が新設されることが紹介されました。アカデミック・ライティングについては主にJWCが、思考技術についてはJWCとHELP DESKが連携して支援にあたります。また、全学部で新「学習ポートフォリオ」がスタートすることから、HELP DESKがこの入力支援を行います。これらの業務を行うために、ティーチング、コーチング、カウンセリング、アドバイジングの違いを取り上げ、それぞれの部署で学習支援を遂行する上で、「やるべきこと」や「やってはいけないこと」を具体的なケースを挙げ、グループでのディスカッションを通して整理しました（たとえば、カウンセリングが必要な場合は、抱え込まずに専門の部署へ繋ぐなど）。加えて、私たちの業務では、相談者に対して無意識に「こうだ」と

思い込むことなく、フラットな気持ちで話を聞くことが求められます。この無意識の思い込みを「アンコンシャスバイアス」と言います。そこで、鈴木浩子先生（日本薬科大学）をお招きし、アンコンシャスバイアスの研修を行いました。

**部門別研修** 2日目はJWCスタッフの研修が行われました。JWCではこれまでのレポートチュータリングやレポート診断に加えて、「思考技術」の授業で取り上げる「話し合い学習法」（Learning Through Discussion）の予習ノートの作成支援をチュータリングの一環として行うことになりました。研修では具体的な学生のペルソナを設定し、ロールプレイを通して支援方法を検討しました。3日目はHELP DESKとオアシスプログラムのスタッフ研修が行われました。両プログラムで提供するピア・アドバイジング/アカデミック・アドバイジングについての理解を深め、部門間連携を推進するためのワークショップ型研修です。また、教務課職員から履修相談に乗る際の新カリキュラムのポイントについて、システム支援課の職員から新学習ポートフォリオのシステムと入力支援についての講習も受けました。

**最終日 自律的な学習者を育成するためのコーチング研修** 4日目は再び全スタッフ合同で、原口佳典先生（株式会社コーチングバンク）をお招きし、コーチング研修を行いました。学習支援に必要なことは、教えこみではなく、相談者が自律的な学習者になるように支援することです。原口先生によると、人が何かをできない時に、ティーチングでは「わかる」ように教える・伝えることでその欠けている部分を補おうとしますが、コーチングでは対話を通してその人から引き出す・育てる・伸ばすことで、その人が「できる」ように支援します。ペアワークやグループワークを通して様々なコーチングのスキルを体験的に学習しました。

新年度から学生の皆さんの学びをより強力にバックアップできるよう、スタッフ一同準備を整えています！



## 2025年度 学士課程教育機構主催のFD・SDの取り組み【秋学期実施分】

### ■ 第12回創価大学教育フォーラム

10月4日（土）13:00～16:30、第12回創価大学教育フォーラムを開催し、学内外より大学関係者や学生ら約175名の参加がありました。関田一彦副学長の挨拶の後、学部や部局が取り組む教育改善について、「教育学部」「障害学生支援室」「教育・学習支援センター（CETL）、システム支援課」「学士課程教育機構」による分科会を挟み、基調講演として共愛学園前橋国際大学学長大森昭生氏より「少子化

時代の到来を踏まえたこれからの高等教育の未来について～『知の総和答申』を踏まえて～』と題して、ご講演いただきました。参加者からは「学生が成長を実感し可視化できる教育の提供や、地域、企業と連携することで現場の実践力を身につけた学生の育成、新たな価値を生み出す関係を構築できる魅力ある大学になるように、教職学一体となって実現していきたい」などの声が寄せられました。

### ■ 第1回 第2回 学士課程教育機構FD・SDセミナー

10月31日（金）に第1回FD・SDセミナーとして、株式会社ビズアップ総研専任講師である辻騎志氏を講師にお迎えし、「指導とハラスメントの境界線 ～アカデミック・ハラスメントの具体的な事例を通して～」と題して、大学における適切な指導のあり方とハラスメント防止のための意識改革について学びました。11月14日（金）には第2回FD・SDセミナーとして、Avinton ジャパン株式会社代表取締役／生成 AI 活用協会協議員の中瀬幸子氏を講師にお迎えし、「AIを超えて、共に考える教育へー世界市民を育む大学の新しい学びのかたち」と題して、ワークショップ形式で行いました。講演では、AIに「できること」と「できないこと」を体験的に理解することを目的とし、AI技術の進

化がもたらす教育への影響や、大学運営の再設計の必要性について学びました。



### ■ 第3回新任教員スタートアップセミナー

1月24日（土）、第3回新任教員スタートアップセミナーが開催され、教員19名が参加しました。参加者同士で秋学期の取り組みを振り返り、山崎めぐみ SPACe センター長（学士課程教育機構・教授）より、学内における学習支援リソースや障がい学生支援などについてお話いただきました。その後、総合学習支援オフィスの石橋博道部長より、「学習支援ポータルにおけるクリッカー機能について」と題してお話いただきました。参加者からは「アドバイザーとしての学生とのやり取りや支援方法、クリッカーの使い方はもちろん、グループで先生方の授業での取り組みを教えていただけたことは大変学びにな

りました。」などの声が寄せられました。



### 生成 AI ミニ FD

春学期に続き秋学期においても生成 AI 活用推進ミニ FD を実施いたしました。1月19日、「生成 AI は大学教育の「何」を代替できるのか？：授業動画の自動化とレポート評価の精度」と題して、小島健 CETL 副センター長にお話いただきました。本セミナーでは、HeyGen などのツールを用いた授業動画生成の品質検証や、プロンプトによる模擬採点の公平性と限界など、「AI による代替可能性」について実演を交えて解説しました。

2月18日には、「CETL の授業観察サービス（PASS）における AI 活用の試行について」と題して、金子朋子 CETL

センター長（当時）が登壇しました。学生の AI 利用実態を紹介した上で、次年度から PASS に導入予定の AI 活用内容について説明。センター長自身の試行的な実践例をもとに、教員が各自の授業で AI を有効活用するための具体的なヒントが提示されました。

3月13日には、井田旬一副学長を講師に迎え、「知識伝達型授業における生成 AI の活用」を開催しました。セミナーでは、Gemini や NotebookLM、Google AI Studio といったツールの具体的な授業活用例が紹介され、最新の AI 技術をいかにして既存の教育形態に組み込み、教育効果を高めていくかについて理解を深める機会となりました。

## データサイエンス教育推進センターの取り組み

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

■ 現在、我が国を取り巻く社会環境は、第四次産業革命の進展と生成AIの急速な普及により、劇的な転換期を迎えています。政府が策定した「AI戦略2019」では、現代社会における数理・データサイエンス・AIのスキルを、かつての「読み・書き・そろばん」に代わるデジタル社会の基礎教養として位置づけました。

■ この戦略では、2025年までに大学・高等専門学校を卒業する全ての学生（約50万人）が、初歩的な「リテラシーレベル」を習得すること、そしてその半数にあたる約25万人が、より実践的な「応用基礎レベル」を習得することを国家目標として掲げています。これは、一部の理系専門職だけでなく、人文・社会科学系を含む全ての学問領域において、データを正しく扱い、AIを道具として使いこなす能力が不可欠であることを示唆しています。

■ 文部科学省は2021年、これらの教育の質を保証するための「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（MDASH）」をスタートさせました。本学はこの国の動向をいち早く捉え、学内の教育改革を加速させてきました。

■ その結果、制度開始初年度である2021年に「リテラシーレベル」、翌2022年には「応用基礎レベル」の認定を、それぞれ公募開始と同時に取得するという、全国的にも先駆けて対応しました。本学の取り組みを支援し、申請のためにサポートして下さった皆さまのおかげです。厚く御礼申し上げます。

■ 本学の教育プログラムの最大の特徴は、その「段階的な学び」にあります。リテラシーレベルの基幹となる「データサイエンス入門」（2単位）は、2022年度より全学必修科目として展開されています。これは、どの学部の学生であっても、卒業までに必ずデータサイエンスの基礎を身につけることを意味します。この科目では、単なる計算手法の習得にとどまらず、データの背後にある倫理的課題や、社会における具体的な活用事例を学ぶことで、文系学生であっても「自分事」として統計学やAIを捉えられるよう工夫されています。

■ さらにステップアップを目指す学生のために、「応用基礎レベル」に対応した「データサイエンス」（2単位）や「AI

基礎」（2単位）を開講しています。これらに加え、各学部の専門性とデータサイエンスを融合させた「各学部データサイエンス演習科目」を適切に配置することで、経済学、教育学、文学といったそれぞれの専門領域において、データという武器をどう振るうかを実践的に学ぶ環境を整えています。

■ 本制度の認定期間（設置時は5年間）に伴い、2025年度にはリテラシーレベルの再認定を申請し、無事に承認されました。また、時代の要請に合わせたカリキュラム改訂に合わせて、応用基礎レベルにおいても変更届が受理されています。なお、2026年度には応用基礎レベルの再認定申請を予定しており、今後も質の高い教育体制を維持・発展させてまいります。

■ さらなる学生の成長のために、本学で力を入れているのが産学連携科目の提供です。具体的には「データサイエンス演習A: 日本IBM共催」（2単位）と「データサイエンス演習B: アクセンチュア後援」（2単位）の2科目です。本学卒業生の協力により、業界の第一線を走る企業による特別講義を提供しています。

■ 日本IBM共催科目では、実際のビジネス現場で直面する課題解決プロセスを体験します。これにより、民間企業でのインターンシップに挑戦し、社会に貢献するための実践的な基礎力を養います。アクセンチュア後援科目では、プログラミング言語「Python」を用いた高度なAIアルゴリズムの学習から、企業の経営判断に資するレベルの深い分析手法までを学びます。いずれの科目も、受講生のなかからも、外資系IT企業また外資系コンサルなどのインターンに合格した学生が出ています。

■ 2025年12月の総合戦略室会議にて、2030年度以降の教育課程の改革に向けて、現在からの準備を進めていくためのタスクフォースとして「教育DX推進タスクフォース」が設置されました。教員がAIを活用してさらに効果的な教育ができるように、また学生がAIを上手に活用して学びに活かしていけるように、データサイエンス教育推進センターとして協力してまいります。

### 学士課程教育機構 新任教職員紹介

学士課程	准教授	嶋田 みのり
WLC	准教授	覚張 シルビア
WLC	助教	尹 敬鈞



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第31号  
発行日 2026年5月12日  
発行者 創価大学学士課程教育機構  
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236  
<https://www.soka.ac.jp/seed/>

